M-GTA 研究会 第 7 回合同研究会 News Letter

第 7 回合同研究会が 2024 年 9 月 21・22 日に行われました。このニューズレターは、データプロバイダ（DP）より分析の経過、感想や学びの報告、スーパーバイザー（SV）のコメント、参加者のアンケートの結果、感想や学びを掲載したものです。M-GTA に関する学習の素材となれば幸いです。

目　次

第 7 回合同研究会　開催年月日：2024 年 9 月 21 日（土）・22 日（日）

会場：大正大学　参加申込：106 名 参加者：95 名

◇ 分析ワークショップ各グループの紹介 ◇

第 1 グループ

DP：宮良淳子（看護学）中京学院大学

SV：坂本智代枝（社会福祉学）大正大学、宮城島恭子（看護学）浜松医科大学 ・・・2

第 2 グループ

DP：米井裕子（看護学）元放送大学修士課程

SV：伊藤祐紀子（看護学）長野県看護大学、今井朋子（英語教育学）文京学院大学 ・・・4

第 3 グループ

DP：小沼聖治（社会福祉学）聖学院大学

SV：春木裕美（社会福祉学）関西国際大学、眞砂照美（社会福祉学）佛教大学 ・・・6

第 4 グループ

DP：竹森美穂（社会福祉学）関西学院大学

SV：松戸宏予（教育学）佛教大学、・長崎和則（社会福祉学）川崎医療福祉大学 ・・・7

第 5 グループ

DP：木村 由美（看護学）獨協医科大学

SV：長山　豊（看護学）金沢医科大学、倉田貞美(看護学）浜松医科大学 ・・・・・・9

第 6 グループ

DP：熊谷歌織（看護学）北海道医療大学

SV：佐川佳南枝（作業療法学）京都橘大学、千葉洋平（スポーツマネージメント）岐阜薬科大
菊地真実（薬学）帝京平成大学 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

◇ アンケート結果　抜粋 ◇ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・13

◇ 参加者の感想や学び ◇ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14

◇ 編 集 後 記 ◇ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

◇ 分析ワークショップ各グループの紹介 ◇

【第１グループ】

DP：宮良淳子（中京学院大学看護学部）

フリースクールをきっかけとし不登校生徒が社会に歩みだすプロセス

１．ＷＳでの分析経過、DP（データプロバイダ）を担当しての感想や学び

この度は、合同研究会での DP という貴重な機会をいただき誠に感謝いたします。SV を担当して頂き多くのアドバイスをいただきました坂本先生、宮城島先生に改めて感謝申し上げます。今回の合同研究会では、木下康仁先生から学んだこと・想い出という時間があり、改めて木下先生のお人柄に触れることができ生前を偲ぶことができました。木下先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

今回の分析 WS を通して、看護学領域以外でご活躍の方にも本研究を意義のあるものと感じてくださる方がいらっしゃることを実感できたことが大きな喜びでした。改めて、本研究の看護学における意義を明確にし、他者に伝わるように言語化することの重要性を感じました。分析 WS では「分析焦点者」と「分析テーマ」について話し合われましたが、「分析焦点者」を設定することのメリットのひとつに「特定の人間の視点からになるので、理解しやすいだけでなく結果を実践に活かしやすい」ことがあることを再認識できました。分析焦点者だけでなく、分析テーマも結果を誰に活用するのかを検討し設定するということが、自分のなかの深い部分にストンと落ちてきたように感じています。限られた時間のなかでしたが、分析ワークシートによる概念生成、カテゴリーの生成、結果図とストーリーラインの作成までなされたことで、WS に参加された皆様から今後研究を進めていく上で大変有用なご示唆を頂くことができました。また、理論的メモ欄をうまく活用できていなかったことに気づくことができ、今後は自分の思考や解釈をその都度記載していくことを心掛けたいと思います。

今まであまり積極的に研究会に参加していないこともあり、今回の DP の担当をすることには勇気がいりましたが、参加者の皆様から大いなる刺激をうけ、研究活動への活力となりました。非常に有意義な時間であり、改めてご指導くださった先生方、ご参加くださった皆様に感謝申し上げます。

２．SV コメント　坂本智代枝（大正大学）宮城島恭子（浜松医科大学）

1）全体の概要

参加メンバーのチェックインのために、①自己紹介、②取り組んでいる研究テーマ、③今の気分について、2 分程度で発表しました。初めての参加者も多く、参加者の準備状況を理解するには、たいへん有効でした。

全体セッションとして、2 日間のタイムスケジュールと到達目標を掲示し、1 日目は分析テーマの絞り込み、分析焦点者の設定、概念生成、ワークシートの活用の仕方等まで、午後から充分な時間があったことから、「定本　M-GTA」のページを示しながら、ミニ講義をして演習というサイクルを実施しました。分析演習は 2 グループに分かれて、タイムスケジュールを示しながら、分析テーマと分析焦点者等の設定等、区切りのところで、全体で発表し合う時間を設けて進行しました。

2）小グループセッションの報告

A グループ：SV：坂本智代枝

A グループ(6 名)では、提供されたデータが読みやすく、理解しやすい内容であったことから、比較的早い段階で参加者が主体的に発言、ファシリテーションできるようになっている様子でした。

質問が多くあがったのは、分析テーマを表しているところのデータから分析するということでありました。「研究する人間」としての判断が求められるところでした。そこで、最初の概念を作成したところで、一人ずつ発表し定義、理論的メモ等を発表しディスカッションする「プロセス」が「研究する人間」の意識化につながるのではないかと思いました。さらに、質問が多かったのは、2 つ目の概念を作成する際に、最初の概念に関係する、対極例としてのバリエーションを探す作業をして、概念を作成することでした。「認識―行動」のプロセスと、同時並行的に概念と関係を作成することを実践することの難しさを実感したことと思います。

反省会でもありましたが、グループで可視化できる機会があることは有効かと思いました。

B グループ：SV：宮城島恭子

B グループ（６名）では、１日目に分析テーマ・分析焦点者の設定について話し合い、特にどの程度オープンにしてどこまで限定をかけるかについて議論しました。その後、各自が１つ目の概念を生成し共有・討議しました。M-GTA に初めて取り組む人が半数以上を占めていたので、スモールステップで共有しました。概念生成において分類指向にならないために、分析の基本的手順は重要であることや、分析焦点者が主語になる概念名について特に確認しました。2 日目は、各自が生成した 3～4 の概念について概念名を付箋に書き出した上で、理論的メモや概念間関係の検討を含めて共有・討議しました。分析焦点者の視点での解釈が難しい、分析焦点者ならではの特徴は何か、概念名はもっと用語を補い限定した方がよいのか等の話題が出て、意見交換や SV からの補足をしました。分析をしてみて分析テーマが妥当であったかについても意見交換しました。最後に、概念名を記載した付箋を動かしながら概念間の関係を皆で検討し、仮の結果図とストーリーラインを作成しました。カテゴリー生成においても分類指向にならないよう留意し、概念間の関係検討から行うことを強調しました。

B グループ全体では、看護系（小児、精神、公衆衛生など）、教育系、福祉系の背景をもつ方がおられ、DP のデータへの関心は高いと感じられました。しかし、B グループのメンバーは看護系が５名を占め、着目データ・生成概念が類似していたため、各自 3～4 つ生成した概念とそこから作成した結果図では、分析テーマ全体を網羅するには至りませんでした。グループ分け時にメンバーの背景も考慮すればよかったと感じました。分析ワークシートの発表は手書きしたものを口頭で読み上げる方法をとりましたが、プロジェクター等を用いて視覚的にも共有できると、深い理論的メモの例などが印象に残りやすかったかもしれないと思いました。

３．分析ワークショップの風景

【第 2 グループ】

DP：米井裕子（元放送大学修士課程）

脊髄損傷者におけるピアサポートが脊髄損傷者の地域での生活に与える影響

１．ＷＳでの分析経過、DP（データプロバイダ）を担当しての感想や学び

この度は、DP として WS に参加する機会をいただき心より感謝申し上げます。SV の先生方とのやり取りや WS に参加した皆様から様々な気づきや学びを得る機会となりました。

WS では、研究概要やインタビューデータの説明と質疑応答の後、2 グループに分かれて新たな 2 つの分析テーマと分析焦点者を設定した上で分析が進められました。そして、2 日目の最後には、生成された概念を用いた結果図とストーリーラインが作成され、グループごとに発表がありました。まず質疑応答では、研究概要で伝えきれなかった研究背景や研究意義、脊髄損傷者におけるピアサポートの特徴、分析方法に M-GTA を選んだ理由、分析対象者の選定や分類の理由、本研究で捉えた現象特性について等のやり取りがありました。このやり取りを通して、本研究で明らかにしようとするプロセスが、分析方法に M-GTA を用いるからこそできるものであると再確認し、当事者や関係者、医療・福祉の専門職等による脊髄損傷者への支援につながる可能性について、より明確に意識することができました。そして、私が捉えた現象特性について WS に参加した皆様と共有することで、本研究へのより深い理解とともに分析していただくことにつながったと感じております。

分析の過程ではまず、グループごとに分析テーマと分析焦点者が再設定されました。どちらも、どういうことを表現したいのかについて、私の研究意図を踏まえた上で丁寧に分析を重ね、絞り込まれたものであり、新たな分析へのヒントをいただけたと感じております。そして、概念生成の過程では、私には考えが及ばなかった様々な視点からのより深い思考過程を経験することができ、たくさんの気づきを得ることができました。また、各グループの分析テーマに違いはあったものの、インタビューデータのほぼ同じ個所に注目した分析がなされ、結果図やストーリーラインでは共通する部分もあったと感じました。特に、結果図の流れが直線的なものではなく、行きつ戻りつしながら試行錯誤しているということや、脊髄損傷者にとっての当事者の存在について「理解者の存在」として〈つながり続ける〉と表現されたことは、自分が導き出した分析結果に通じるものであり、自分の研究を支持していただいたように感じました。

研究会を終えて、自分の研究やインタビューデータを曝け出すことは恥ずかしいことでもありましたが、SVの先生方にも参加者の皆様にも本研究に関するデータについて、終始大変丁寧に扱っていただき、私が特に大事だと考えた部分を汲んだ分析をしていただけたと感じられ、大変嬉しく思っております。DP としては至らない部分も多く、不安と緊張の中で参加した研究会でしたが、SV の伊藤先生、今井先生、２グループの参加者の皆様、この研究会を支えてくださった世話人の皆様のおかげで安心して参加することができました。また、この研究会を通して、より客観的に自分の研究を捉え直し、課題を見出す機会となり、本研究や脊髄損傷者に関して違う分野の方々に知っていただける機会にもなったと捉えております。今後の課題としては、今回の気づきを参考にしながら、脊髄損傷者におけるピアサポートについてどのように伝えていけるか、今一度検討したいと考えております。

２．SV コメント　今井朋子（文京学院大学）

今回、合同研究会で初めて SV を担当させていただきました。ワークショップが始まるまで不安も感じていましたが、SV の伊藤先生がグループをリードしてくださり、また参加者の皆様の活発な議

論に支えられ、私自身もSVとして多くの学びを得ることができました。また、グループ2に参加されていた山崎浩司先生からも貴重な助言をいただきました。グループ２の皆様には、心より感謝申し上げます。

グループ2では、まずデータ提供者の米井さんから研究概要の説明があり、その後、参加者からの質問に答えていただきました。米井さんは、ご自身の分析テーマや分析焦点者の設定過程についても具体的に説明してくださいました。続いて、提供されたインタビューデータについて、事象の時系列、居住地など複雑な要素を整理しながら、参加者全員で確認を行いました。参加者はAチーム（担当：伊藤先生）とBチーム（担当：今井）に分かれ、それぞれ同じデータを用いて分析を行いました。２日間で、分析テーマや焦点者の設定、コア概念の生成、さらにはプロセスの始点、中間点､終点にあたる概念の生成と､それらを視覚的に示す関連図の作成と説明を目標に進めました。

B チームでは、米井さんが既に設定されていた分析テーマから一度離れ、各メンバーが考えた新たな分析テーマの案を出して行くこととしました。分析テーマの設定にあたっては､「誰と誰の相互作用か」や「～のプロセス」という視点を重視して議論を進めました。また、分析焦点者の設定に関しては、メンバーから「分析焦点者」と「インタビュー対象者」の違いが分かりにくいという声が上がり、生成された理論がどのような人に応用可能か、その適用範囲を考慮しながら分析焦点者を設定しました。

1日目の後半では､各チームがコア概念の生成に取り組みました｡Bチームではデータを詳細に見返し、コア概念となりうるヴァリエーションを抽出し、その定義を考えました。その際、ヴァリエーションの範囲をどう設定するかという課題がありましたが、定義を考えながら、範囲を調節していくことにしました。メンバーそれぞれの定義を共有し、一つの定義に絞りました。

2 日目には、宿題として考えてきたコア概念の概念名の案を各メンバーが披露し、概念名の検討を行いました。その後、分析テーマに基づいたプロセスの全体像を把握するために、始点、中間、終点に対応する概念を生成しました。メンバーからは、概念名の生成が、定義にある言葉やヴァリエーションの中の言葉につられてしまい難しいという意見がありました。そこで、分析焦点者が主語なのだから、分析焦点者の視点や気持ちを概念名に表すのはどうかと一つ大胆な概念名のアイデアを提案しました。そこから、メンバーから柔軟な概念名のアイデアがどんどん生まれていきました。生成した概念をもとに関連図を作成し、概念同士の関係性を視覚的に整理しました。

最後に、各チームの代表がそれぞれチームで生成した概念と関連図について発表しました。同じインタビューデータを基にしていても、分析テーマや分析焦点者が異なることで、生成された概念や関連図が異なる結果となっておりとても興味深い発表でした。概念名の付け方などもそれぞれのチームの個性も出ていると感じました。

今回、B チームではプロジェクターでパソコンの画面を映し出し、全員で同じ画面を見ながら分析を進行することができました。この手法によってメンバー間での意見交換がより活発になり、効率的な議論が可能となりました。

３．分析ワークショップの風景

【第３グループ】

DP：小沼　聖治（聖学院大学）

ソーシャルワークにおけるソーシャルアクションのモデル形成

―精神保健福祉士の実践に着目して―

１．ＷＳでの分析経過、DP（データプロバイダ）を担当しての感想や学び

1）ワークショップでの分析経過

初日はスーパーバイザーによるM-GTAの基本を学ぶミニ講座から始まり、DPが提供したインタビューデータの逐語録を基に、受講者が２グループに分かれて、分析テーマの設定に取り組んだ。２日目は各受講者が作成した分析ワークシートに基づき、各概念の関連性を検討し、結果図作成のプロセスを体験した。

2）DPを担当しての感想や学び

今回のインタビューデータが、「ソーシャルアクション」という社会変革に向けた援助技術がキーワードであることから、受講者の方々にとって、分析の困難さもあったのではないかと思われる。そのような前提の中、受講者の皆様が専門分野の違いを越えて、自分自身のデータであるかのごとく、丁寧にデータを分析し熱心に議論を深めてくださった。このような全体の熱量に深い感銘を受けた。

スーパーバイザーによるサポーティブな雰囲気づくりのもと、受講者の方々より多角的な解釈のご意見をいただき、まさに目から鱗が落ちる連続の２日間で、楽しく充実したあっという間のひとときであった。決して一人で書籍を学ぶだけでは得られない、柔軟な発想やアイデアを多数得られた。

合同研究会を通じて、日常の忙しさという波に飲み込まれていた研究へのモチベーションが復活したと同時に、M-GTA の基本を振り返る重要な学びの時間となった。そして、ともに学ぶ仲間のつながりの大切を感じられた２日間であった。このような貴重な機会を頂戴できたこと、この場をお借りして深謝申しあげたい。

２．SVコメント　春木裕美（関西国際大学）

第３グループでは４名の欠席があったため 10 名の参加となりました。グループワークは２班に分かれて、グループごとに分析焦点者と分析テーマを設定し、分析ワークシートを立ち上げ、概念生成、カテゴリー化、結果図の作成まで行いました。DPの小沼先生からご提供いただいたデータは

１名分ではあったのですが、ディテールが豊富な語りであり、参加者の方々にとって分析焦点者の動きをイメージしやすいものでした。

初めの概念生成では、参加者の方々は定義づけに頭を悩ませ、文章化することの難しさを感じておられる場面もありました。しかし、DP の小沼先生にデータについてのご説明をいただいたり、グループでディスカッションし、思考を巡らせることで「今のそれ、ピッタリ来た」という言葉が出たり、拍手が起こったりするなど、和気あいあいと進んでいきました。一方で、一斉に「うーん」と考え込んでおられたり、行き詰ったりしているとき、また、少し軌道修正が必要なときには、SV から「なぜそう思ったのか」「なぜこの言葉を選んだのか」「ここではどんなことが起こっているのか」などの問いの投げかけを随時させていただき、深い解釈を促すことを心がけました。
グループワーク終了時に参加者の皆さんから、「初学者だったので進め方が分かった」「自分の研究も M-GTA で分析していきたい」「改めて自身の M-GTA の分析を振り返るきっかけとなった」などのご感想をいただきました。

合同研究会では私自身が初めての SV だったので、本当に至らないところばかりでしたが、困ったときには眞砂先生をどんどん頼らせていただき、さらに、実行委員の林先生と唐田先生にもご助言いただくことができて本当に心強かったです。SV の立場としても学びが多いワークショップとなりました。皆様、ありがとうございました。

３．分析ワークショップの風景

【第４グループ】

DP：竹森美穂（関西学院大学）

医療ソーシャルワーカーが継続学習に取り組むプロセス

１．ＷＳでの分析経過、DP（データプロバイダ）を担当しての感想や学び

1）研究概要

人々の生活上の様々な困難に対して、社会福祉の視点から問題解決に関わるソーシャルワーカーには、人々の生活構造や制度政策の変化も踏まえながら支援するため、継続学習が求められる。しかし、その方法については十分に研究されてこなかった。そのため、ソーシャルワーカーは手探りで継続学習に取り組んでいる実態がある。本研究はこの問題意識を背景に、ソーシャルワーカーが専門性を向上させるために、どのように学びを重ね、継続しているのかを明らかにすることを目的とした研究である。医療機関で働くソーシャルワーカー（医療ソーシャルワーカー：MSW）11 名を

対象に実施したインタビュー調査を、M-GTA で分析した。

2）テータ提供者として提示した分析焦点者と分析テーマ

本研究の目的に照らして、当初提示した分析焦点者は「継続学習を行っている現任の医療ソーシャルワーカー」、分析テーマは「医療ソーシャルワーカーが現場に出て、学びの必要性を認識してから継続学習を進めていくプロセス」であった。

3）ワークショップでの分析経過

ワークショップ冒頭では、データを参加者が分析していくために必要な質疑を受けた。研究全体の概要を含め、用語の定義や、調査協力者の概要などであった。分析焦点者は当初提示した「継続学習を行っている現任の医療ソーシャルワーカー」のままとして、さらに 2 グループに分かれて、分析テーマを設定し、分析が進められた。なお、2 グループの分析テーマはそれぞれ、「MSW が実践を重ねながら学びの必要性に気づき学習が変容するプロセス」、「MSW が環境との相互作用において学びの必要性を実感し、継続学習を進めていくプロセス」となった。

4）データ提供者を担当しての学び

今回提供したデータはすでに分析を終えているもので、私の中では一定結論が出ているものである。しかし、2 人分の逐語録をもとにして、参加者（つまり異なる「研究する人間」）がデータに向き合うと、違う観点からデータ解釈がなされた。時間上の制約がありながらも、私自身が取り上げなかったデータの箇所から、非常に興味深い概念が生成されたことは、新たな発見であった。一方、限定されたデータからではあるが、私自身が生成した概念（今回のデータ提供に含めなかった逐語データから生成した概念）に近い概念が示されたりもした。この 2 つの体験は非常に興味深く、M-GTA において分析テーマと分析焦点者、そして研究する人間の存在がいかに重要かを再確認するものであった。

２．SV コメント　松戸宏予（佛教大学）

ワークショップを振り返って

1）ワークショップの構成：全体とグループ、個人作業の明確化

ワークショップでは、全体での作業と 2 つに分けたグループ作業、そして、個人作業の明確化を図った（表 1「ワークショップの流れ」参照）。まず、全体ではデータ提供者からの情報の共有を図ること（データを読んでいくうえでの背景を知る）、各グループで行った作業内容の発表を通して、同じデータからの分析者がどこに目をつけていたのか結果の違いを確認することに焦点を当てた（全体で行う場合は、長崎 SV が担当）。次に、グループでは、個人の意見、参加者同士の意見交換を通して結果図への集約や分析テーマが意味することを考えさせた。並行して、個人作業では、分析テーマ、分析ワークシートを用いて、概念の定義、概念の生成、そして、ストーリーラインなどの作成を練習した。

2）グループダイナミクスの効果

2 日間の集中作業を通して感じたのは、参加者の自信が 1 日目から 2 日目にかけて強まっていったことだった。1 日目は、各自が考えた分析テーマの発表では、参加者によっては、緊張が見られた。しかし、2 日目の概念と概念の関係の検討では、概念名と定義を示したフセンをボードに貼付したのち、「どうしてそこにフセンを貼付したのか」参加者が自分から意見を述べる姿勢に転じていった。対極例についても、参加者が一緒に考えていった。発言する言葉も 1 日目より、堂々としていた。M-GTA では、複数の人数で分析することで、１人では思いつかった解釈が得られる。今回の

ワークショップは、グループダイナミクスを体感した形となった。

3）今後の改善点

先に挙げた概念同士の検討を図にしていく時間を十分にとるために、分析ワークシートに描いていた概念と定義をフセンに書き写す部分も１日目の課題に含めてはどうかという意見があった。

表１．　ワークショップの流れ

time table		1日目の工程	time table		2日目の工程
13:00	13:25	目的・動機（データ提示者）	9:00	9:10	本日の予定
13:25	14:00	Q&A	9:10	9:25	作成したWSの回し読み
14:00	14:10	データ収集について（データ提示者）	9:25	9:35	作成した概念と定義をポストイットに転記
14:10	14:30	Q&A	9:35	10:00	概念と定義の発表
14:30	14:40	分析焦点者の確認	10:00	10:10	休憩
14:40	14:45	各グループで個人による分析テーマ作業→個人発表	10:10	10:35	概念と概念の関係→結果図へ
14:45	14:55	休憩	10:35	10:50	分席テーマに関する答えの検討
14:55	15:35	グループでの分析テーマの決定作業	10:50	11:10	ストーリーラインの作成
15:35	15:42	各グループ発表・SVによるコメント	11:10	11:30	グループ内でのストーリーラインの発表
15:42	15:52	休憩	11:30	11:50	発表と　Q＆A
15:52	16:30	分析の作業：個人作業WSを用いて、着目した箇所の概念の生成	11:50	12:10	感想とクロージング・アンケート
16:30	17:00	生成した概念と定義　根拠を踏まえた発表	12:10	12:15	机配置片付け
17:00	17:30	各グループ発表			
17:30	17:50	1日目を終えての参加者・データ提供者・SV 感想・補足説明			

３．分析ワークショップの風景

【第５グループ】

DP：木村由美　（獨協医科大学）

統合失調症者家族が自分らしい生活を再構築するプロセス

１．ＷＳでの分析経過、DP（データプロバイダ）を担当しての感想や学び

1）分析ワークショップでの分析過程

分析ワークショップの分析過程は、各自、逐語録を熟読し分析テーマと分析焦点者を設定するという事前課題が課せられての参加であった為、逐語録の内容を把握された状況でのスタートであった。ワークショップの実際として、初日は、SV のファシリテートのもとグループ内でコンセンサスを得た分析テーマと分析焦点者を１つ設定することから始まった。分析テーマの設定までには、レジュメでは読み取れなかった DP のリサーチクエスチョン、意味のある問いについて、徹底的に明ら

かにした。このやり取りの中で M-GTA の分析上、重要な考え方や解釈について SV により定本を用いた解説を加えて頂き共通理解が図られた。このワークに多くの時間が費やされリサーチクエスチョンの共有をはかった上で分析テーマの設定をした。この段階で初日のワークが終了となり、逐語録の中から自分が気になった文脈について挙げ定義と概念を作成する課題が出された。2 日目は、各自記入した分析ワークシートを基に共有した。特に、なぜそのデータが気になったのか、またその概念は何に繋がっているのか理論的メモに記載したそれぞれの思考過程を含め共有した。グループメンバー全員の概念をもちより概念間の繋がりと相互作用を意識しながらプロセスの検討を図り、出来上がったプロセスの全体像に、DP が概念間の間に見出されていた概念を加えることで結果図・ストーリーラインを完成させた。

2) DP を担当しての感想・学び

まずは、ワークショップ開催までレジュメを通して私の思考の整理と意味のある問いに導いてくださった SV の倉田先生と長山先生に感謝申し上げます。先生方には、私はどのような事象が見たいのか、そして誰のために役立てたいのかといった純粋な思考に寄り添い導いてくださいました。

そして、ワークショップの過程でグループメンバーとの質疑応答の時間は、分析テーマ設定に向けての大切な過程であり、私自身のリサーチクエスチョンへの曖昧さが明瞭になっていく過程でもありました。また、メンバーが提示してくださった概念のわかりやすさは現象をありのまま表現されたものであり、現象が見える概念の生成に苦慮していたところを解決することができました。本研究に新たな気づきを与えて頂いたこと、そして何より研究協力者あっての私の大切なデータを、メンバーの皆さんも同じように大切に思ってくださり真摯にデータに向き合ってくださったことに感謝いたします。

今回、SV の先生方、グループメンバーの問いに応える中で、ほんの少し【研究する人間】に近づけたように思います。あっという間の 2 日間でしたが、私にとっては今後の【研究する人間】としての深化に多くの示唆を与えて頂いた時間となりました。

私にこのような機会をくださり、実り多い時間となったのも M-GTA 研究会合同研究会実行委員の先生方の尽力のおかげです。先生方に深謝いたします。ありがとうございました。

２．SV コメント　長山　豊（金沢医科大学）

グループ 5 に参加されたメンバーの皆さんは、分析ワークショップの事前準備として、統合失調症の子をもつ家族の視点に立ってデータを深く読み込んでいたため、分析ワークショップ開始時点から積極的に議論を交わしていました。データ提供者の木村さんが提示された逐語録からは、統合失調症の子の症状が改善する兆しが見えず、家族が振り回されて暗中模索の中で、家族会とつながり、少しずつその状況から脱していくプロセスが非常に豊富に語られていました。参加されたメンバーの皆さんは、自分が最も関心を抱いた「うごき」の意味を共有しつつ、データ提供者の木村さんから分析焦点者のリアリティ溢れる体験に関する解説を交えていくことで、この研究課題におけるプロセスが変化していく重要な局面への考察が深まっていきました。そして、データ全体のプロセスを俯瞰的に捉えた分析テーマをシンプルに表現すること、そして、プロセスの中で分析焦点者の行動が変化していくポイントを捉えて平易な言葉で表現することの大切さを学び合えたのではないでしょうか。分析ワークショップでは、グループ全体で概念生成および概念間の関係性を検討することによって、研究テーマに基づくプロセスが具現化して描かれていく面白さや醍醐味を改めて実感することができました。実際のデータを題材に用いて M-GTA の分析プロセスを学ぶ体験は、分

析ワークショップでしか味わうことのできないものです。この分析ワークショップでの学びが、参加されたメンバーの皆さんの今後の研究活動に必ず役立つと思います。また、今後、M-GTA を通して研究活動を継続していく上で、メンバーの皆さんがお互いに助言し合える、支え合える仲間になったのではないかと感じています。最後に、データ提供していただいた木村さん、SV として現象の本質を捉えてご助言くださった倉田先生、分析ワークショップに参加された皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

３．分析ワークショップの風景

【第 6 グループ】

DP：熊谷歌織（北海道医療大学）

肺がんサバイバーがスティグマを持ちながら生きるプロセス

１．ＷＳでの分析経過、DP（データプロバイダ）を担当しての感想や学び

まず初めに、この度の合同研究会においてデータ提供者として参加する機会を頂きましたことに、M-GTA の発展に貢献された木下康仁先生をはじめ研究会の皆様に心より感謝申し上げます。そして、木下先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。M-GTA と出会い、研究を始めてからいつかお会いしたいと思い続けていたにも関わらず叶わぬ現実に接し、自分の行動力のなさを悔やんでおります。

今回データを提供させていただいた研究は、2022 年 10 月の第 96 回定例研究会で発表し、その後博士論文として提出したものでした。ですが最後まで分析テーマが揺らいだため一旦封して冷却しておりました。今回はそれを 1 年半ぶりに解凍し、分析テーマや研究題目を微調整してインタビューデータとともに提出させていただきました。インタビューデータは 2 つ出させていただきましたが、参加者の皆様は事前準備の段階で本当に深く読み込み、分析テーマや概念も考えてきてくださっていました。私のデータはかなり長い物でした（30 ページずつありました）ので、自分のものでも大変なのに人のデータを読むのは更にご苦労されただろうと思うと同時に、とても有難く感じました。生のインタビューデータを開示する機会はこれまであまりありませんでしたので、インタビューの方法についても振り返り検討する良い機会となりました。

研究会でのグループワークは、分析テーマと分析焦点者の検討から始めるために、冒頭で研究の概要をご説明させていただきました。すると案の定参加者の皆様からは、私の研究題目や分析テーマに関する質問が矢のように降りかかり、分析テーマの検討が永遠の課題のように思われ目まいがしました。しかしその議論を経た後に、SV の先生方から今回のワークショップでの分析テーマの設

定について方向性をお示し頂いたことにより、結果的には「肺がん経験者が社会生活を続けるプロセス」という何ともシンプルで明確な分析テーマになりました。そこが私個人の中では最も驚きを感じた部分であり、自分がいかに説明的で長々とした分析テーマで研究をしてきたかということに気づかされました。

その後、さらに２グループに分かれ分析ワークシートの作成を始め、私は１つのグループに入り一緒に分析をさせていただきました。すると今度は、博論の結果にある定義しか浮かばず、凝り固まっている自分の頭とその柔軟さを取り戻すことの困難さに気づかされました。さすがに論文として公表した後ですので、とことん吟味した結果ですから仕方のないことかも知れませんが、M-GTA は同じデータで３本は書けると聞いたこともありますので、この頭を柔らかくすることへの課題意識が芽生えました。この気づきは、参加者の皆様のお立場が様々であったことも大きく影響していると思います。私は看護が専門ですが、どうしても同じ研究分野の者同士で議論することが多く、多職種、他領域の研究者が集まることが、この研究会の良さの一つだと改めて感じました。

さらに最終的に、結果図とストーリーラインまで導くことができたことは、研究の全体的な流れをつかむことにつながったと感じています。概念の生成に関してはもう少しじっくり取り組みたかった面もありますが、ダイナミックに分析することもまた達成感につながり有意義でした。

これからは私が大学院生に研究を指導していかなければならない立場となりますが、今回の経験を活かし研究の楽しさをまず伝えていけたらと思っております。今回このような貴重な学びを得る機会を下さいました６グループの SV の先生方、そして参加者の皆様、誠にありがとうございました。

２．SV コメント　千葉洋平（岐阜薬科大学）

６グループでは、はじめに全体で、研究概要の確認と分析テーマの設定を行いました。研究概要の確認では、データ提供者の熊谷先生から、研究題目（「肺がんサバイバーがスティグマを持ちながら生きるプロセス」）や研究の背景・目的についてご説明頂きました。その上で質疑応答を行い、肺がん患者の方の状況や検討したいプロセスの範囲等について質問が上がりました。参加者の方がよくデータを読み込まれてきたこともあり、質疑応答を通して、スムーズに共通理解を図っていくことができました。

その後、あらかじめ考えてきた分析テーマを、一人ずつ発表して頂き、それから全体で分析テーマについて検討していきました。その際、分析テーマへ様々な意図を盛り込もうとして、長い表現が多くみられたことから、できるだけ短く表現するよう SV の先生方からアドバイスがされる場面もありました。また、プロセスの終点に継続的なニュアンスが含まれていたこともあり、参加者の方が分析テーマの設定に悩まれる様子も見受けられました。その際も、SV の先生方より助言が与えられつつ検討ができたことで、分析テーマを設定する際の感覚を養えたのではないかと思います。

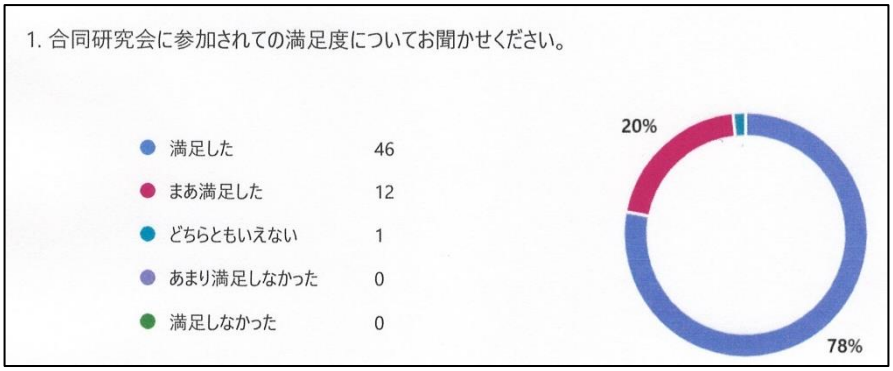
それ以降は、２つのグループに分かれて概念生成を行っていきました。二日目には概念間の関係やカテゴリーについても検討でき、どちらのグループも結果図とストーリーラインの作成までたどり着けました。最後にお互いのグループの内容を共有することもでき、それによりデータの解釈の幅を広げられたと思います。

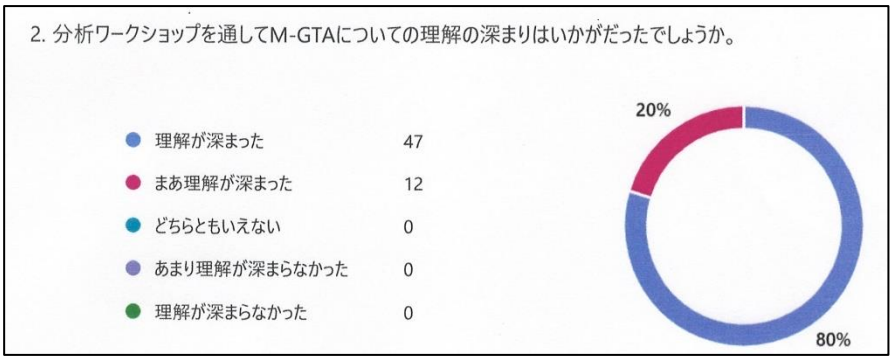
この二日間で、M-GTA への理解も進みつつ、人間関係もほぐれてきて、議論が時間を追うごとに活発になっていったことも印象的でした。参加者の方の表情から、ワークショップへ参加した満足感も伝わり、充実した時間を過ごして頂けたのではないかと思います。

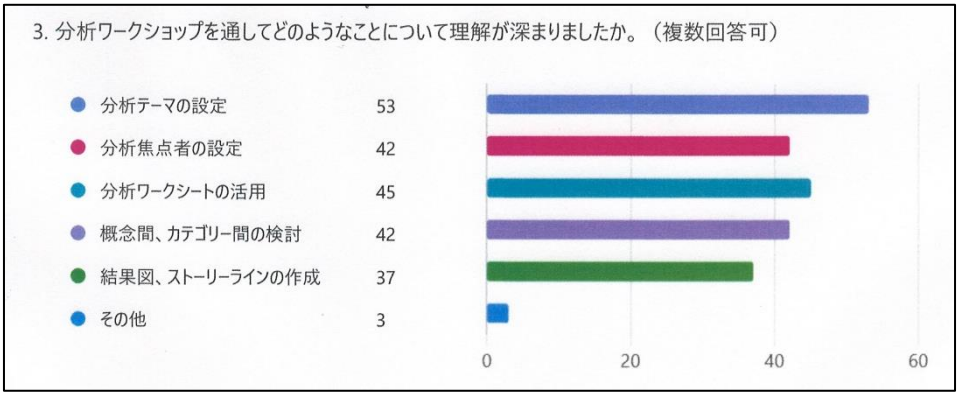
３．分析ワークショップの風景

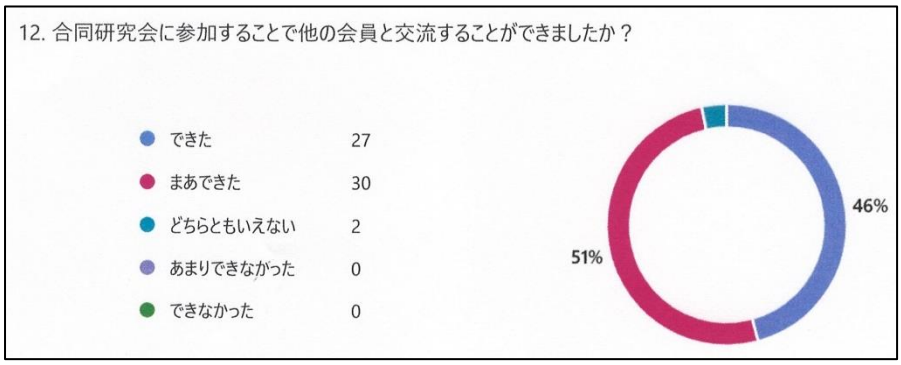
◇ アンケート結果 抜粋 ◇

59 名の回答を得ました。ご協力をありがとうございました。









◇ 参加者の感想や学び･ご意見 アンケートからの抜粋 ◇

アンケートの感想の回答から､ニューズレターへの掲載の許可の得られたものを掲載しています。

＜感想や学び＞

①分析の手順を一通り経験することで、なんとなくの見通しが立った。非常に有意義なワークショップでした。

②丁寧に分析することの大切さを実感しました。また、グループワークにて他者の視点や思考に触れながら導き出していく過程から学ぶことばかりで、グループワークを効果的に取り入れる意義も確認できました。ありがとうございました。

③実践型のワークショップで書籍の読み込みだけでは漠然としていた分析の流れを体系的に理解できました。自身でどこまで再現できるか未知数ですが、今回、指導頂頂き助言を振り返りながら自身のデータに向き合っていきたいと思います。貴重な機会をプロデュースしてくださった皆さま、事例を提供頂いた先生方に感謝申し上げます。

④あたたかな雰囲気で､初心者ながらご質問させていただきやすく､気づきや学びが深まりました。同時に、知ることで難しさも実感いたしました。研究ノートを作って、拙くとも思考を可視化しながら頑張ります。実行委員の皆さま有難うございました。

⑤SV の先生との温かく丁寧な対話（あえてご教示やご指導ではなく対話と表現させて頂きました）を通して、分析方法の理解と事例の理解を深めることができました。温かく活発な雰囲気のグループのおかげで、疑問点や不安な点を率直に開示することができ、他の方とのディスカッションも、分析の中で自分の中で曖昧だった部分を (些少な理解ですが) 理解することに繋がったと思います。データに基づくこと、データの語りは何を意味しているのかを丁寧に丁寧に考えていく大切さを改めて実感しました。また、精製された理論は応用者のためにこそあることを実感できました（そのヒントも皆様とのディスカッションを通して学びました)。

⑥実際のデータを分析しながら指導を受ける、意見交換をするという機会は他にはないため、大変貴重な経験、学びであった。

⑦定本を読んでも分析の作業がイメージしきれなかったのですが、おかげさまで、まず手を動かすことだけはできるかも⁉と思えるところまでの理解はできました。諸先生方の木下先生の思い出のお話しも勉強になりました。ありがとうございました。

⑧ワークショップでグループの方々と分析ワークシートを用いて概念を決めていくことから、結果

図、ストーリーラインの作成まで行うことができ、定本に書かれていた複数人で話し合うことの重要性を体感できました。1 人では分析がなかなか深められず悩んでいたところだったので、今後は研究会で様々な方の意見を頂き学会で発表を目標に頑張りたいです。

⑨合同研究会に初めて参加させていただき、最初とても緊張していましたが、スーパーバイズの先生たちやメンバーのおかげで楽しく学ぶことができました。次回は初学者のためのワークショップも開催して欲しいです。なかなか本を読んでも、理解できないところもあり、今回、そういうことなんだ！と理解できた箇所あります。

⑩実際にグループで分析したことで、より理解が深まったと思います。また、励ましの言葉をいただいたり、他の方々とお知り合いになれたことは、とても有難い機会になったと思います。

＜今後へのご意見＞

①時間配分をきちんとしてほしい

②ご負担かもしれませんが、2 日目の時間を長くして頂き、結果図まで理解したかったです。

③事例が 2 つ提示されたが、分析は 1 事例で行ったので事前準備も 1 事例で良いと思いました。

＊分析 WS においてインタビューデータ 2 事例を扱うことの実行委員会からの説明＊

合同研究会では原則として、DP の方に２つのインタビューデータを提供していただいています。それは同じインタビューガイドでも得られたデータは研究参加者によって内容が異なること、異なる概念生成の可能性を感じていただくこと、最初に分析するインタビューデータを選ぶという体験を学習すること等の目的があるからです。最初の分析に取り組む前の段階の学びを体験していただくために、あえて 2 つのインタビューデータを取り扱っています。ご理解ください。なお、倫理的配慮等により 1 つのデータしか提供できない場合もあります。

◇ 編集後記 ◇

第 7 回合同研究会においては 100 名を超える方々に申し込みをいただき、ありがとうございました。

新型コロナウイルス流行後、初めての対面での合同研究会の開催となりました。合同研究会における分析ワークショップは、参加者の方々同士、参加者と SV が直接ディスカッションを交わし、分析過程を学習するために、対面での開催が必須と考えました。参加者の方々の満足度が高く、実行委員会はホッと安堵しています。合同研究会のニューズレターには分析ワークショップの写真を掲載しました。今回は参加できなかった方にも、研究会の熱気が伝わったでしょうか。合同研究会の準備は大変で、2 年に 1 回しか開催できない状況です。生のデータを多くの方とディスカッションしながら分析の過程を学習できるよい機会です。2 年に 1 回のチャンスをお見逃しなく！

次回の合同研究会でも、みなさまのご参加をお待ちしています！（唐田順子）

第 7 回合同研究会実行委員（東京 M-GTA 研究会）
会　長：林　葉子
委員長：唐田順子
委　員：菊地真実、岸田泰則、丹野ひろみ、都丸けい子、根本愛子、平塚克洋